

2) 精神発達遅滞児の早期発見法

山下 文雄 久留米大学小児科
松石豊次郎 久留米大学小児科
塩月 由子 久留米大学小児科
吉村 皓子 久留米保健所

<目的>

精神発達遅滞児（以下MRと略）の早期発見療育をはかるため、MRの発見と関係の深い病歴、発達歴、理学所見、神経学的所見の特徴を知ること。さらにこれらの成果を応用して、乳児健診の現場で利用できる早期診断法を確立する。

<方法>

久留米市におけるMRと関係の深い病歴（発達歴を含む）の後方視的研究はすでに報告した（厚生省心身障害研究 昭和57年度報告書）。

母の年令30歳以上、仮死、保育器収容、酸素投与の既往歴、出生時体重2500g以下、過期産（42週以上）、哺乳力低下、おとなしくて手がかからない、体が柔らかい、人の声に反応しにくい、視線が合いにくい、首すわり5カ月以上、つたい歩き10カ月以上、独歩1歳半以上、有意語1歳半以上等であった。

今回乳幼児期におけるMRの診察法を確立するため、1982年久留米大学小児神経外来を受診したMR児76人中フォローアップができた57名について検討した。1歳までの問診では、おとなしく手がかからない、体が柔らかかった以外遠城寺式・乳幼児分析的発達検査法で社会性、言語理解の遅れがあり多くは運動発達の遅れも認めた。

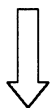
理学所見では、小奇形（3つ以上）、大奇形、大頭症、小頭症傾向、低身長、体重増加不良などが、神経学的所見では追視テスト、布かけテスト、物の持ちかえや手と足の協調運動、人の声に対する反応、模倣動作、運動発達の遅れと筋緊張低下が多く認められた。1歳以後は有意語の遅れや、言語理解・身体部位認知などの遅れ、社会性、運動発達の遅れが見られた。但し自閉症は大多数が2歳以後に医療機関の受診が多く、1歳まではよく聞くと視線が合いにくいや、人の声に反応しにくいなどを認めたのみで、運動の遅れはなく言葉

おくれや対人関係の遅れのみでLow Risk群で発見が遅れていた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



目的

精神発達遅滞児(以下 MR と略)の早期発見療育をはかるため、MR の発見と関係の深い病歴、発達歴、理学所見、神経学的所見の特徴を知ること。さらにこれらの成果を応用して、乳児健診の現場で利用できる早期診断法を確立する。